

堀正嗣編著

『子ども・権利・これから』  
(明石書店 2001年)

山縣文治 (大阪市立大学)

「そもそも子どもの権利とは何なのかという考察の上に立って、子どもの権利を実現していくということはそれぞれの立場でどのようなことを意味しているのか、またこれから何が必要なのか。……そこで、子どもの権利のこれからについて私たちなりの一定の整理と問題提起を行いたいと考え、本書を上梓することといたしました」。編集の目的を編者の堀正嗣氏はこのように記している。

子どもの権利条約の成立前後から、わが国でも子どもの権利に関する出版物が多く刊行された。しかしながら、その多くは、成立史を含む権利条約の単なる解説であったり、条約の規定する内容から、現状を批判的に分析するというものであった。また、中心となる研究者や実務家の背景により、教育面を中心とした指摘に力点が置かれていたり、福祉面を中心とした指摘に力点が置かれていたり、純粋に法律的な視点の指摘であったりと、内容が偏りがちであった。

本書は、単なる子どもの権利条約の解説書でもなければ、現状報告でもない。かといって研究書でもない。社団法人子ども情報研究センターの役員による子どもの権利に関する研究会の成果を、歴史、家族、子育て、地域、学校、環境、福祉、権利擁護などの多様な視点から明らかにしたものである。子ども情報研究センターでは、従来より、人権保育や共生保育に積極的に取り組み多くの実績を残してきた。子どもの権利条約成立以降は、子どものための電話番号「ユア・ボイス」、子どもアドボケイト養成講座、チャイルドライン大阪、子ども政策フォーラムなど、広く子どもの権利の擁護およびその実現に実践的に取り組んできた。本書は、このような実践の基礎になる子どもの権利について、理想や規範のような抽象的な議論ではなく、また、権利を振りかざした功利的な運動論でもない、きわめて現実的な視点から論述されている。また、権利を個人の視点を中心に論ずるのではなく、センターの基本的な考え方である、連帯や共生のという視点から構築するという意欲を随所に読みとることができる。

とりわけ評者が関心をもったのは、真野京子による「環境：うわすべりの政策の下で」と題する章である。真野の指摘する環境権は、個々人の暮らす環境以上に、結果として一人ひとりの生活に影響を及ぼす、子ども総体の生活環境を意味している。評者は児童福祉を中心に研究・実践を行うものであり、子どもの育つ環境が非常に重要であることは十分認識していたつもりであるが、ミクロ視点の環境にとらわれていた感があり、マクロあるいはメゾ視点での環境権という形で組み込むという視点は弱かった。環境権という視点は、日本子ども社会学会の研究・実践においても、今後検討する必要がある課題であると感じている。

「子どもの権利について論じるということは、社会を考えることに他ならない。子どもの

育ちにとって豊かな社会の構想は、『社会が豊かであるとはどういったことなのか』と考えることである。それは、近代をとらえ返そうとする試みでもある(25頁)。執筆者のひとり、桜井智恵子はこう記している。障害児福祉の先達である糸賀一雄は、「この子らに世の光を」ではなく、「この子らを世の光に」と主張した。哀れみや慈恵の対象として障害児をみるのではなく、この子らが輝いて、初めて世に安寧がもたらされるということである。ここに共通する社会変革の思いをみる。

子どもの権利条約は、子どもには受動的な権利だけでなく、能動的な権利も同等に存在していることを明らかにした。保護される存在であるだけでなく、自分らしくあるために、自ら考え行動する存在であるということである。社会の変革は、まず子どもを世の光として位置づけ、子ども自身が生き生きと輝ける存在として生活できる状況を作るところから始まる。

本著は、このようなことを考える際の基礎をわかりやすく教えてくれる好著である。子ども社会学会の会員の基礎科学や実践分野はきわめて多様である。しかしながら、本著は、このような多様性を超えて、子どもの生活と権利を考えさせてくれるものであり、是非とも一読をお勧めする。また、執筆陣の方々には、次のステップとして、一方でより実践的な取り組みに関するまとめを、一方でより理論的な子どもの権利論の提示をお願いしたいものである。

南本長穂・伴恒信編著

## 『子ども支援の教育社会学』

(北大路書房、2002年)

秦 政春 (大阪大学)

本書は、教育社会学研究のみならず、教育学研究全般にわたって大きな影響を及ぼされた(いや、いまでも依然として大きな影響を及ぼされている)、新堀通也先生のもとで学ばれた「中堅研究者」(本書ではこう記されている)によって書かれたものである。まずは、内容をすこし紹介しておこう。

「子どもの未来へのメッセージ」と題された新堀通也先生の特別寄稿の論文に続いて、基本的には以下の3部構成になっている。第1部「子どもの発達ステージ」、第2部「社会の中の学校・学校社会」、そして第3部「社会変化と子ども」といった具合である。

それぞれの内容に関しても、かなり熟慮された跡がうかがえ、ユニークな構成になっている。とくに、第3部では子どもに直接的に関連する社会の変化を取り上げ、今日の、そして今後の教育課題が明快に論じられている。この部分の中身をキーワード風に紹介しておくと、「メディア」、「グローバル化」、「競争化社会」、「教育問題」、そして「社会体験とケア」といった内容である。

本書の特徴の1つとして特筆すべきことは、なによりもまず『子ども支援の教育社会学』